

## 書 評

『はじまりが見える世界の神話』植朗子編著、阿部海太挿絵（創元社、2018年）

### 不安定であることの可能性

鋤柄 史子

Fumiko SUKIKARA

不変で絶対的な物語、神話。読み物として洗練された姿から、わたしたちは一体どの程度その全貌を知ることが出来るのだろうか。本来、時と場合によって形を変えた柔軟で躍動的な語りは、本という限定的な空間の中で固定され静的な綴りへと変換された。恐らく神話と呼ばれる物語群は、言葉の成り立ちとともに変遷の過程にあったはずだ。文書化、収集、編纂の末に現れるのは、その不安定性を剥ぎ取った姿だ。

『はじまりが見える世界の神話』は、各地域に現存する神話と呼ばれる二十の物語群を見開きの挿絵とともに紹介する。万物の始まりと終わり、有と無、光と闇、そして生と死の共存する世界。挿絵はその一端を厚みのある色使いで描く。可視化という強力な技術を駆使し、はるか以前から語られてきたその世界観を表現しようとする。挿絵の後には、各地域に携わる若手研究者たちの文章が続く。筆者によっては物語の筋が読みづらい点が少々気になるものの、内容紹介、学術的見地からの解説は限られたスペースの中で複雑な世界観を簡潔に伝える。これらの仲介を通して知ることの出来る各々の世界は、物語の構成、要素、登場人物、そしてその語り方に多彩だ。

本書が紹介する物語群を通して、歴史的推移のなかで変容してきた言葉とモノの関係性をうかがい見ることが出来る。わたしたちの社会に通底する言葉の意味の解釈の仕方は、神話が神話となる膨大な時間の流れの中で起こった変形の一つの結果に過ぎないのだろう。例えば、本書で紹介されている古代ギリシア・ローマ神話の中で、初期の記述は「カオス」を今のように混沌、無秩序として表していない。古代ギリシアの詩人ヘーシオドスが紀元前 700 年頃に記した『神統記』によると、世界の起こりはカオスとともに始まるが、それはぼっかりと空いた口、空隙や裂け目を意味した (58 頁)。まずカオスが生じ、そこから原初の神々がおのずと誕生したという。時代を経た 1 世紀初頭、古代ローマの詩人オウィディウスによる『変身物語』にもカオスは原初の存在として登場する。しかし、ここでのカオスはあらゆる要素を含む無秩序で不調和な塊として表されている。

また、「死」の意味する概念にも変化が見られる。近代以降現代に至るまで、死は公の場から分離した、他者には見えないことのないプライベートな空間で対処される。それは

最早内密な出来事であり、終わりを意味するのみである。けれども、かつて死はより身近で、普遍的かつ可塑的な存在だった。ヴァルター・ベンヤミンによると、それは生という経験を表裏に表し語り伝える<sup>よすが</sup>縁であり、それが源泉となり物語が生まれてきた。経験が伝達され共有されるうちに、語りの芸術性は発展してきたのだ。本書が引用する古代の語りでも、死は世界の創造に関わりあるものとして表象されている。ここにいくつか紹介したい。

例えば、死した身体が自然万物の起源となる話。中国では、天地の分離を成し遂げた巨人、盤古がやがて死を迎えた時、その死体の各部位が万物の要素となる。息が風と雲に、声が雷となり、左目は日、右目は月に、四肢は天地を支え、五体は岳々へ。血液は河川に、筋は地脈、肌と肉は田畑、体毛は草木、歯と骨は金属と石、骨髓は真珠と玉石、そして汗は雨となった（80-82頁）。さらに、盤古の死体に寄生した多数の虫が後の人間になったという。同様に、北ゲルマンに伝わる万物創世話も巨人の死から始まる。神々によって殺された巨人ユミルから流れ出た血が海や湖となり、肉は大地に、骨は岩に、歯と顎、粉骨は砂礫へ、頭蓋骨は天空に、脳みそは雲に、そしてまつげは巨人が復讐するのを防ぐ砦へと整えられた（20-22頁）。あるいは、身体から切り取られた首が万物への変態を象徴する話もある。イロクオイ北米先住民に伝わる話で、双子の創造神の一人デハエーンヒヤワコーンは、持ち去られた生みの親の首を取り返し胴体に繋げることによって、母を夜の光、月として生き返らせた（92-94頁）。また現グアテマラのキチェ族の伝記で、本書では触れられていないが双子の英雄神フナフプーとイシュパランケの誕生は、ヒカロの実となった先代のフンフナフプーの首が契機となっている。それが処女イシュキックへと語りかけ、その手のひらへ唾をかけることによって、双子の種が処女の身体に宿る。

身体から分離した魂の浮遊について語る叙述もある。例えば、スラヴ民族は鳥の姿を映す風はその浮遊性を重ね、肉体が火葬されるまで死者の魂は木々を揺らすと伝える（68-70頁）。冬の間鳥たちが過ごす国は海の遙か向こう、イーリイと呼ばれる場所であり、そこは同時に死者の国ブヤーン、聖なる地でもあった。古代インドでもまた、死者の楽園こそ光あるアーリア人の故郷であるとし、その創造主であるヤマを讃える（110-112頁）。そして、ヤマを失った妹ヤミーの悲しみが後に神々に夜を作らせ、時間の概念が生み出されたのだと語る。これによってヤマの死は過去の出来事となった。

上記の物語のなかで、生と死は起点と終点を持つ一方向的な線形上に表象されていない。そうではなく、生と死は互いに連続しあい、循環的な関係にあると言える。生によって死が起因し、死によって生が語られてきたのだ。

そして、本書は物語群の内容紹介に留まらない。筆者によっては各々が「神話」と呼ばれるに至った歴史的経緯を読者に伝える。特に記述すべきは文書化による転換であろう。文書化という技術は、語りが現在わたしたちの知る叙述形態となる過程の深淵で強力に作用した。その過程には、物語群が柔軟性を奪われ、堅固で一定した叙述へと変形する様、つまり動的な語りから静的な語りへの変遷が透写される。文脈、要因は物語によって異なるものの、分岐を促した作用点にいくつかの共通要素が見られる。

まず、誰の手によって記録されたのか。古代エジプトの場合、それは後代の研究者に

よって組立てられてきた。物語群がその当時に体系化された訳ではなく、後々に発見された葬祭文書や神々への讃歌を記した文字資料、あるいはギリシア・ローマ時代の史料を断片的に繋ぎあわせる作業が行われてきた(89頁)。ケルト民族は、紀元前四世紀頃にヨーロッパ大陸へと勢力を広げながら、隣り合う他部族との関係性の中で同化、拡散を繰り返してきた。民族移動の中で、集団的に語り継がれたはずの物語も消散する。現在わたしたちが知る事の出来る「ケルト神話」は、アイルランドやウェールズに渡ったグループの残した記録や、他部族による保存資料、考古学的遺産に頼っている(47頁)。本書で紹介されているのは、そのなかでも豊富な資料とされる10-12世紀のアイルランドで写本されたものであるようだ。

また、これらの物語が民族アイデンティティの根幹として扱われてきたことも事実である。文献の散逸に苦しむ西ゲルマン系の現イギリスやドイツの地域では、隣人の中に自分たちの失われた神話を夢想する。彼等は北ゲルマンの物語群に西ゲルマンとの共通性を探し求めてきた(23頁)。アルメニアの場合は、外部勢力への抵抗の象徴として神話を語る(65頁)。ローマ、ペルシャ、アラブ、モンゴル等、歴代のいくつもの強豪な帝国に囲まれるという地理的条件から、彼等は二千年もの間その支配下に置かれてきた。一時はアルメニア国の名を消失し、離散を余儀なくされた。そうした中にありながら、人々はその根を絶やそうとしなかった。むしろ、常に侵略の危機にさらされていたからこそ、強固な民族性が築かれたのだろう。彼等の間に伝わるのは、強大な侵略者と対峙する英雄譚だ。本書が紹介するハイ族の族長ハイクの物語は、その中でも特にアルメニアの人々に親しまれているようだ。

さらに多くの場合、その歴史の中で編纂・収集の過程における文字化という作用が働いている。元々文字を伝達手段としなかった人々の間で生まれた伝承の中には、他者による侵略の結果として保存されたものも少なくない。スラヴ民族の場合、十世紀のキリスト教による制圧を受けた結果、表現技法を細部に伝える資料は残されていない。そのため現在の研究は民間伝承史料や民族誌に依存する(70頁)。口承を基本に語られてきた、イロクォイ北米先住民(95頁)やキチェ族(17頁)と称される人々の信仰する世界観は、植民地時代に渡来した宣教師たちの手によってアルファベット化された。

上記の例を通して、物語群が変わらずその形態を保ち続けてきたのではないこと、そして動的な語りから静的な語りへの移動の過程に、抗争、同化、拡散といった諸部族間の政治的関係性が大きく関わっていたことを伺い知ることが出来る。不変で絶対的な物語。神話は、元来そうであったのではなく、そうであるように解釈されてきた。『古事記』もその例にもれない。書物としてまとめられた時点で、それは意図されて正統なる歴史となり、後世へと続く権力の証書となった。神話は、ある時には民族内部に根付いた集団的アイデンティティの記憶として、またある時には他者を知り、支配するための知的財産として意味付けが行われてきた。この意味で対照的なのは、『古事記』に登場する「クニ(国)」の概念である。本書の解説によると、これらクニは物語の前景として既に存在するのではなく、物語の進展に伴い、形成の過程にある(101頁)。言い換えると、『古事記』は日本の成り立ちが完了したという結末、終焉を表すのではなく、むしろそれが経過途中にあることを伝えている。

最後に、文書化という技術がもたらした叙述の表現形式の変形にもふれておきたい。活版印刷の発明以前、伝承手段の基盤であったのは話す／聞くという関係性である。同じ空間に居合わせ、語り手の口から発せられる言葉に聴衆が耳を傾ける。この関係は一方的なものでは決してない。語りの空間は双方向からの応答を基に形成される。語り手の語りは、同時に聞き手の経験となる。やがて、聞き手が語り手となり、物語を紡ぐ一部となる。そして、口承を基盤とした語りには際限がない。時と場合によって、小さくなったり、大きくなったりする。筋を中心に据えて語られていても、横道に逸れることもある。物語は既に構築されている訳ではなく、語りと同時並行に形成の過程にある。語り手の経験によって物語は柔軟に形を変える。

ところが、語りが文章の下で行われるようになると、その形態は強制的に変化する。話す／聞くという関係の下で経験を共有した空間は、文章を通して再現されることはない。そこには沈黙があるのみで、書き手も読み手も孤独のうちに文章と向き合う。あらゆる書き手—作家、再話者、翻訳家—は、書斎の机に向かいながら言葉を組立てる。そして読み手は、構築された文章を頭の中で読み解いていく。解釈はひとりひとりの読者に委ねられたと言いながら「作者の死」を説いたのはロラン・バルトであったが、書き手、読み手に可能なのは、ただ文章を通じて相手の像を想像するのみである。

また、本という枠の中で表される語りは、削除、修正、編集の結果としての姿だ。既に始まりを持ち、終わりが用意されている。物語の幅は、書き手に決定権が任意されている訳ではない。むしろ編集作業における経済的、時間的制約が頁数を決める。印刷技術によって何部と複製され、同一の語りが読み手に渡る。読み手が手にする時点で、すでに語りは終焉している。口承の語りから生まれた物語がその文脈から離脱し、出版物へと収められる時、それは一場面も欠けることのない不変なモノローグとなる。

こうしてみると、文書化は古代の物語に二重の作用をもたらしてきたと言える。一つは権力の表象として、そしてもう一つは表現形式自体の変形である。ある一端の記憶を歴史、つまり現在へと接続する連続的な過去と解釈し、その象徴と化した「神話」。そこには、今や文体としての表現形式において口承とは異なる不動の語りが構築された。この二重の作用は互いに補完しあいながら神話を形成する。神話を知ることが、古代の人々によって形作られた語りにふれるということだけではなく、それが物語として辿ってきたこうした歴史の変遷の道を振り返る作業ともなる。

今日わたしたちが神話と呼ぶ物語群から感受出来るのは、長い年月の中で構築された世界観の全容のうち、繰り返しの様態変化の末に現れたほんの一面に限られる。未知が大半の部分を覆う。だからこそ、近現代の多くの研究者、芸術家、文学者がその奇異で大胆かつ荒唐無稽な世界観に惹かれ、限られた資料をもとにそれを解釈し、表現しようとしてきたのだろう。神話研究の歴史を振り返ると、解釈とその表象方法にも変成の跡が見える。『はじまりが見える世界の神話』は、現在の日本における神話への取り組みを平易かつ集約的に表す。若手研究者と芸術家が共同し各々の解釈を組み合わせることで、神話について多方向的に語ろうとした書籍である。

## 参照文献

Barthes, Roland (1968) *La muerte del autor*. [online]

<https://teorialiteraria2009.files.wordpress.com/2009/06/barthes-la-muerte-del-autor.pdf> (参照 2018-12-25). (Original work published 1967) [日本語版] ロラン・バルト(1979)「作者の死」花輪光訳, 『物語の構造分析』, 79-90, みすず書房.

Benjamin, Walter (2009) *El narrador. Sujeto y relato. Antología de textos teóricos* (María Stoopan Galán, Coord). México: Facultad de Filosofía y Letras, Dirección General de Asuntos del Personal Académico, UNAM, 31-54. [日本語版] ヴァルター・ベンヤミン (1996) 「物語作者—ニコライ・レスコフの作品についての考察」(三宅晶子訳), 『ベンヤミン・コレクション2 エッセイの思想』(浅野健二郎編訳), 283-334, 筑摩書房.

Ong, Walter (2016) *Oralidad y escritura. Tecnología de la palabra*. México: FCE. (Original work published 1982) [日本語版] ウォルター・オング(1991)『声の文化と文字の文化』(林 正寛, 糟谷 啓介, 桜井 直文訳), 藤原書店.